

# ノグチ

核保有

統合  
合併

## 巨大流通の跋扈と闇

### マスコミの土砂降りタタキ 「白い恋人」の深層解剖

瀕死の道内97自治体病院で医師・看護師争奪戦

3セク・札幌下水道公社が憲法違反!?  
職員採用で「前科・前歴」照会していた

ジャパンケアがコムスン  
分割譲渡の期待と不安

廣島  
鼻科  
シメツクタンク「HIT」  
へ  
広島  
雄  
理事長  
降板



いま入って、次の旅からすぐおトク!

### 野口観光ポイントカード会員募集中

ご宿泊・ご利用のたびポイントが貯まります。貯まったポイントは次回以降のお会計時、おトクにご利用できます。入会金・年会費は一切無料。野口観光グループでご利用いただけるおトクで便利なポイントカード。この機会にぜひご入会ください。

ポイントは100円で5ポイント。  
1,000ポイントごとに1,000円分ご利用いただけます。

入会方法  
入会金・年会費無料。各ホテルフロントにて、入会申込書に必要事項をご記入の上、お申し込みください。その場でカードを発行いたします。※詳しくはお問い合わせください。



野口観光グループの  
ペア宿泊券が5組に当たる!

詳細・応募要項は本誌50ページをご覧ください!!

地の恵みを美しく

野口観光グループ



詳しくは   [www.noguchi-g.com](http://www.noguchi-g.com)

●お問い合わせ・ご予約は 札幌営業所・予約センター TEL (011) 717-2455  
札幌市北区北7条西4丁目札幌丸増ビル7F (札幌駅北口)



〈ふくだ さとし〉  
1951年生まれ56歳。北海道大学医学部卒。85年米国カリフォルニア大学サンディエゴ校留学、96年北大医学部耳鼻咽喉科助教授、01年7月より現職。北大病院長副院長、日本耳鼻咽喉科学会理事、日本学術会議連携会員。

北海道大学大学院医学研究科耳鼻咽喉科・頭頸部外科学分野

**福田 諭** 教授



〈おおさき よしのぶ〉  
1954年生まれ53歳。旭川医科大学医学部卒、84年国立療養所道北病院勤務、90年米国国立癌研究所研究員、86～90年・93～97年旭川大第一内科助手、97年より現職。05年1月同大呼吸器内科科長。日本肺癌学会評議員、日本呼吸器学会評議員。

旭川医科大学医学部内科学講座 循環・呼吸・神経病態内科学分野

**大崎能伸** 講師

発作が必要であるというこ

「自然にないし治療により軽快すること」の疾患であることとらえられてきた。

また、喘息に伴う気管支壁の血管の変化や、壁が硬くなる肥厚の程度をCTや拡大内視鏡を用いて研究している。

このため、札幌医大では、防塵マスクの装着など予防のための指導を行うと共に、胞子の中のどの成分によつてこれらの疾患が発症するかについて分子レベルで検討。この成分をほぼ突き止めることができ、近々論文で発表する予定だ。

大崎能伸講師。

「吸入ステロイドホルモン薬が喘息患者の治療成績を良くし、また、この薬剤を使用することによつて喘息死を低下させることもできたという結果が出ています。北海道は全国と比べ、使用量が多く、喘息死を起こす比率も低い。ただ、まだまだ使用頻度は低いため、呼吸器内科の専門医に相談していただきたいですね」と

旭川医大循環・呼吸・神経病態内科学分野では、気管支喘息の治療として、喘息の発作を予防する吸入ステロイドホルモン療法を積極的に導入している。

も判明している。さらに、喘息患者に関しては、中枢気道に比べ、末梢気道の炎症が強い方がより重症であることがわかり、どちらの気道の炎症が強いのかを調べる新しい診断用の装置も導入している。

## アレルギー性鼻炎の新たな概念

### ● 症状と治療法

アレルギー性鼻炎の3大症状はくしゃみ、鼻水、鼻づまり。アレルギーと結合した肥満細胞（マスト細胞）からヒスタミン等の物質が放出され、鼻粘膜や周囲の毛細血管等に作用することで、鼻水等の主症状があらわれる。

「アナフィラキシー・シヨック（即時型過敏反応）」が起これないとも限らないので注意が必要だ。

近年、バラ科の果物以外の果物にアレルギー症状がみられることも分かっている。「Bet v1」はバラ

今後は、この薬剤の適切な量や期間などについて検討していく方針だ。

また、道北、道央地方で見られる花粉アレルギーと

喘息発作の関連性について研究しており、シラカンバ花粉症は重症の喘息発作になりやすいことがわかっている。



(はらぶち やすあき)  
1956年生まれの50歳。旭川医科大学医学部卒。89年7月札幌鉄道病院耳鼻咽喉科医長、91年12月ニューヨーク州立大学バッファロー校医学部小児科学講座Research Instructor。93年7月札幌医科大学耳鼻咽喉科学講座講師、98年11月より現職。日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会理事等。

旭川医科大学医学部  
耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座

**原 洌 保 明** 教授



(ひみ てつお)  
1953年生まれの53歳。札幌医科大学医学部卒。86年米国ペイラー医科大学留学、96年札幌医科大学耳鼻咽喉科学講座助教授、99年7月より現職。パラニー学会正会員、日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会理事。

札幌医科大学医学部  
耳鼻咽喉科学講座

**氷 見 徹 夫** 教授

近年、このアレルギー性

科に限定されるが「Bet v2」(プロフィリン)はトマト、大豆、バナナ、パインナップル等バラ科以外の果物や野菜についても相同性が認められている。本道における花粉症の発症時期は次ページの別表の通りだが、最近はこの時期の合間や、これらをまたぐようにして花粉症の症状を訴える患者も多い。

最近、新たな花粉症原因抗原の一つとして考えられているのが「ヘラオオバコ」だ。これは北海道から沖縄まで広く分布し、道路わき等で見かける植物だが、北大耳鼻咽喉科・頭頸部外科学分野の福田論教授は「一昨年実施したヘラオオバコ花粉の誘発試験により花粉症にヘラオオバコが関係していることが証明できた」と語る。

鼻炎に関して「One airway, One disease」という概念が注目を集めている。これは、上気道と下気道が1つのairway(気道)であるという考え方で、気管支喘息とアレルギー性鼻炎を1つの疾患としてとらえる概念だ。

いる。

●各大学の研究  
北大耳鼻咽喉科学講座では、シラカンバ花粉症について資源適合仮説に基づいて翌年の花粉飛散予測を実施し、良好な結果を報告している。

WHOとWAO(世界アレルギー機構)の共同研究で提唱され、研究ではアレルギー性鼻炎が、気管支喘息に先行発症することが多く、アレルギー性鼻炎の治療をすれば気管支喘息の発症を抑えることができる可能性が報告されている。

シラカンバ花粉は年によって飛散量が大きく変化し、大量飛散年にはシラカンバ花粉患者が増加し、花粉症の症状も増悪する。こうしたことから「花粉飛散量を前もって知っておくことは重要で、情報を早くつかむことで季節前に投与し、発症を予防する、あるいは症状をおさえることもでき、広い意味では医療経済にも貢献できる」と福田教授。

方

減感作療法は、頻りに長期通院を要すること、副作用があるとといった短所などがある治療法であるが、一方で根治的な治療だとして

支持する動きもある。この減感作療法の短所を補う治療として現在、注目を集めているのが、「舌下減感作」だ。これは抗原液を注射する代わりに舌下錠を舌下にのせるだけのもので、自宅での治療が可能となり、現在のところ、副作用もほとんど報告されていない。

同科の中丸助手は千葉大学と共同で、舌下錠の有効

学と共同で、舌下錠の有効

学と共同で、舌下錠の有効

**ゴルフ会員権はおまかせ下さい!**  
北海道ゴルフ会員権取引業協同組合加盟 [www.bestgolf.co.jp](http://www.bestgolf.co.jp)

ベストゴルフ

株式会社 **ベストゴルフ** 札幌市中央区北4条東1丁目2 サンアイビル1F

0120-399-377

北海道における花粉症の発症時期



研究では、上皮系細胞から主に産生されるサイトカインに誘導された樹状細胞という抗原提示細胞が、アレルギーの炎症を引き起こす「マスタースイッチ」であることがわかり、現在は、サイトカイン産生を誘導する物質を調べている。

さらに、核内ホルモン受容体であるPPARガンマのアレルギー反応抑制作用、上皮のバリア機能、抗原輸送機能などのメカニズムについて研究している。今年の3月には同大が中心になってウエブアンケートを用いた北海道の花粉尘の実態調査を実施。結果、花粉症の有病率が、全国では19・6%、北海道は12・6%で、北海道は全国と比べ、花粉症の有病率が低いことが明らかになった。

札幌医大は経済産業省の地域新生コンソーシアム研究開発事業の研究テーマ「免疫賦活機能の高い植物性乳酸菌を加えた野菜ヨーグルト等の開発」と、文部科学省の知的クラスター創成事業の研究テーマ「アレルギー・炎症反応評価による機能性食品素材開発」の研究グループに参画している。

また、氷見徹夫教授は、今年度より副理事長として、スギ花粉疎開ツアーなどを実施するNPO法人イムノサポートセンター(理事長・西村孝司)の活動を支援している。

「積極的にこれらの社会的活動に参加し、アレルギー発症予防に貢献したい」と氷見教授は語る。

旭川医大耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座では、道内に多いシラカンバ花粉症に対するペプチドワクチン療法の研究を行っており、国内外から高い評価を受けている。

様々なタイプの患者にペプチドワクチン療法を適用させるには、多数のHLA(白血球の型)と結合するペプチドが有用だが、同大では、数多くのHLAに適合し、アレルギー反応を抑える制御性T細胞を活性化させるペプチドを発見した。

この研究成果については、昨年の秋に米国の学術誌である「ジャーナル・オブ・イムノロジー(Journal of Immunology)」に掲載された。

さらに同大では急性中耳炎の起因菌の一つであるインフルエンザ菌に対するペプチドワクチンの開発を目的として、インフルエンザ菌であるP6蛋白に着目。この研究でも数多くのHLAに結合するペプチドの候補をみつけ、研究結果を今年の6月にフロリダで行われた国際中耳炎シンポジウムで発表した。

「今後、ペプチドワクチン療法をシラカンバ花粉症のみならず、小児の急性中耳炎や頭頸部癌(喉頭がんや咽頭がん等)に対する治療としてヒトにも応用できるのではないか」と原潔保明教授は期待する。

性、安全性を検討する臨床研究を昨年の10月から開始している。

またアレルギー性鼻炎予防を目的とした「ヒストン脱アセチル化酵素(HDAC)の働き」に着目した基礎研究に力を入れている。

近年、酸化ストレスがアレルギー反応を増悪される可能性が報告されている

が、同大が研究した結果、酸化ストレスにHDACが関与することがわかり、9月27日に開催される日本鼻科学会でこの研究成果を発表する予定だ。

札幌医大耳鼻咽喉科学講座では、鼻粘膜の上皮と脂質メデイエーターに着目したアレルギー性鼻炎の病態解明研究を進めている。

また、氷見徹夫教授は、今年度より副理事長として、スギ花粉疎開ツアーなどを実施するNPO法人イムノサポートセンター(理事長・西村孝司)の活動を支援している。

「積極的にこれらの社会的活動に参加し、アレルギー発症予防に貢献したい」と氷見教授は語る。

旭川医大耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座では、道内に多いシラカンバ花粉症に対するペプチドワクチン療法の研究を行っており、国内外から高い評価を受けている。

様々なタイプの患者にペプチドワクチン療法を適用させるには、多数のHLA(白血球の型)と結合するペプチドが有用だが、同大では、数多くのHLAに適合し、アレルギー反応を抑える制御性T細胞を活性化させるペプチドを発見した。

この研究成果については、昨年の秋に米国の学術誌である「ジャーナル・オブ・イムノロジー(Journal of Immunology)」に掲載された。

さらに同大では急性中耳炎の起因菌の一つであるインフルエンザ菌に対するペプチドワクチンの開発を目的として、インフルエンザ菌であるP6蛋白に着目。この研究でも数多くのHLAに結合するペプチドの候補をみつけ、研究結果を今年の6月にフロリダで行われた国際中耳炎シンポジウムで発表した。

「今後、ペプチドワクチン療法をシラカンバ花粉症のみならず、小児の急性中耳炎や頭頸部癌(喉頭がんや咽頭がん等)に対する治療としてヒトにも応用できるのではないか」と原潔保明教授は期待する。